音声科学研究 I (1961)

ドイツ共通口語と舞台発音

塩 谷 饒

Gemeindeutsch und Bühnenaussprache

Durch den Rundfunk bzw. das Fernsehen bietet sich heute überall in Deutschland die Gelegenheit, wo die reine, mundartfreie Aussprache gehört wird. Im großen und ganzen kann sie wohl mit der Bühnenaussprache von Siebs gleichgesetzt werden. Was aber phonetische Einzelheiten betrifft, so zeigt sie immer wieder eine gewisse Abweichung oder Abmilderung, wie denn auch bei der Sendung die auf Fernwirkung berechnete, scharf ausgeprägte Artikulation unnötig ist. So wird das unbetonte e [ə] vor Liquida bzw. Nasal sehr oft weggelassen oder nur als Gleitlaut angedeutet. Die drei stimmlosen Verschlußlaute p,t,k sind zwar vor betontem Vokal deutlich aspiriert; aber vor nichtbetontem Vokal ist die Aspiration schwach oder fehlt ganz. Das lange, offene e [ɛ:], welches man orthographisch mit ä bezeichnet, wird häufig wie geschlossenes e oder halboffen gesprochen.

Die Endung-er [ər] wird meist durch den Mittelzungenvokal [ɐ] ersetzt. Diese letzte Neigung ist sogar auf den Bühnen des klassischen Schauspiels bemerkbar. Wenn die Dialektausgleichung oder das Abschleifen der lokalen Besonderheiten heute in steigenderem Maße als früher stattfindet, so richtet es sich nicht einmal nach der festgeregelten Bühnenaussprache als solcher, sondern nach der abgemildeten Form, wie sie sich besonders im norddeutschen Gebrauch geltend macht. Das ist sicherlich ein Beweis dafür, daß sich die lebendige Entwicklung kaum abschnüren läßt.

Yutaka SHIOYA

1. Theodor Siebsは1898年にドイツ舞台協会とゲルマニストの代表者からなる委員会の討議にもとづいて，„Deutsche Bühnenaussprache Hochsprache" をあらわした．彼はこれで舞台発音統一の指針としたばかりか，説教・講演等公開の場所で話者がよるべきものとし，さらには学校教育での模範的発音として推薦した．それ以来 Hochsprache という語は発音・文法・語彙の何れにおいても標準的と認められる言語形式の意味で用いられるようになった．しかし „Bühnenaussprache" そのものが，今日全ドイツ語地域の人

塩谷 饒：京都大学教養部助教授（ドイツ語学）．Yutaka Shioya, Assistant Professor of German language, University of Kyoto

々から無条件に標準的な発音と認められているかといえば，これにはなかなか異論がある．たとえば共通ドイツ語の起源の研究で業績をあげた L. E. Schmitt のごときは，それは Exportdeutsch だと評する[1]．すなわち現実にはドイツ語地域で語られることがないのに外に向って標準として掲げられたものだとの謂である．一方 Kuhlmann のようにはっきりと，Bühnenaussprache はラジオによって普及したものであり，方言色のない発音の修得を望む外国人がよるべき唯一の規定だと主張するものもいる[2]．

2．現在ラジオ・テレビが共通口語の普及に大きな役割を果していることはドイツでも認められる．西ドイツ各地の放送局のアナウンサーの発音は，München 放送で時としてやや Oberdeutsch なまりのある声がきかれるほかは一様に方言色のないものである．語彙の点では西ドイツとの間に若干の開きが生じかかっているといわれる東ドイツの放送も，発音については西と変るところがない．それどころか，仏領アルサスの Strasbourg 放送局でも，そのドイツ語放送の時には，ドイツ各地の放送とまず変らない発音が観察される．しかし，放送ドイツ語が細かい点まで Bühnenaussprache と一致しているとは言えない．そこでは Siebs によって標準として規定された発音が一々実現されているのではない．ただその音韻体系の主要な特徴が一致しているのだと言えよう．実はその特徴こそすでに成立しかけていた共通口語の特徴であって，これが Siebs によって採用されたのである．現在ドイツ口語共通語は次第次第に Siebs の規定に向って統一されて行くのではなく，ここに述べた特徴を土台として急速に弘がりつつあると見るべきである．

3．Siebs は Bühnenaussprache を規定するにあたり，多くの点で北ドイツの発音を顧みたと言われるがそれには十分の理由があった．そもそも共通文語が確立するに至ったのは，18世紀の半ばのことである．この頃から学校教育の普及にともない，教養ある人々はようやくこの文語（Schriftsprache）を口語の共通語としても用いるようになったが，はじめは大体自分の故郷の方言に影響された発音を示していたに過ぎない．しかるに口語で使用していた低独方言とはまったく異った文語を受入れた北ドイツでは，これを一応書かれた所に従って発音する傾向があったから，やがて発音が統一に向う素地ができて来た．これはさらに Preußen 王国の急激な膨脹によって促進されたが，推進力となったのは官吏の動きであった．すなわち，中部・南部ドイツでは幾多の小国家に分れていて，官吏は頻繁に居所を変えることがなかったのに対し，Preußenにおいてはたえず移動を命ぜられる慣習があった．それゆえ，子弟は学習時代に居所を幾度か変えざるを得ない状況にあり，ことさらなる方言的な発音を避ける必要があったから，彼らの用いる言語には発音の均一

化が行われたのである．同様な現象はBerlinの教養ある人々の間にも見られて来た．Berlin 土着の人々は今日なお Berlinisch と呼ばれる方言を語るので有名であるが，Berlin が Preußenにひきつづきドイツ帝国の首都として重要さを加え，各地の人を引寄せることによって急激に人口を増すにつれ，方言的特性を払拭する傾向があらわれ，教養ある人々の間に発音の接近が見られるようになった．Berlin の位置はいうまでもなく北ドイツであり，ここで均一化された発音は同様な条件で成立した官吏の子弟のそれと本質的には同じものであった．余りにも有名な Berlinisch のために，またドイツの文化的・政治的特殊性が原因で Berlin が他の大都市に抜出た圧倒的な地位が認められなかったため，ここで „標準的" な発音が聞かれるという主張をあえて行うものはまれである．しかし Berlin をもふくむところの北ドイツ一帯にわたってあらわれた発音統一の傾向は，何よりもまず Siebs によって顧みらるべきものであったのである．

4．すなわち北ドイツにおいては

/bitən/ : /biːtən/ (bitten) (bieten)	/hytə/ : /hyːtə/ (Hütte) (Hütte)	/tsuk/ : /tsuːk/ (Zuck) (Zug)
/bet/ : /beːt/ (Bett) (Beet)	/hølə/ : /høːlə/ (Hölle) (Höhle)	/ofən/ : /oːfən/ (offen) (Ofen)
	/ban/ : /baːn/ (Bann) (Bahn)	

のように同じ母音音素に該当すると解釈されながら，長短の音韻的区別をもつ母音の一群が整然たる体系を作っている．それはまた十分とはいい難いが他の方言に比べれば何れよりも文語の正書法と呼応する．Siebs は大体においてこれを正しく認め，kurzes-i, langes-i という呼方で一貫した．なお彼は長母音は短母音よりもやや狭く形成されるという調音上の特色をとらえて langes-**geschlossenes**-i, kurzes-**offenes**-i と呼ぶことにした．

子音について見るならば，中部からとくに南部一帯にわたって無声の lenis となっている b, d, g, z（=b̥ d̥ g̊ z̥）を北ドイツの習慣に従って有声に決定した．北ドイツの /p, t, k, s/ と /b, d, g, z/ の音韻的対立は，下表で例示されるように語義の区別に重要な役割を果して居り，語末の場合を除いて文語の正書法と一致しているので，この決定ももっともな処置であった．

Pein/pain/ : Bein/bain/　　Torf/torf/ : Dorf/dorf/　　Kuß/kus/ : Guß/gus/
Mußе/muːsə/ : Muse/muːzə/

しかしながら，ほとんどすべての場合にわたって明瞭性を必要とする舞台発音の目的にそわせるため，音韻論的には意味を持たない発音の特徴をすべての場合に要求したり，あるいは現実に行われる発音の傾向を否認したことも幾つかある．すなわち，舞台発音はど

こにおいてもこの通り発音されることのない規準と評される所以である．たとえば語頭の母音を必ず声門閉鎖をもって発音すべきとし，無声閉鎖音の帯気を一貫して要求している．また口語において口蓋垂によるRの発音が弘まっているのに，舌音によるべきことを要求している上，語末の弱音節におけるeが（Handel, fahren, Himmel などの語の）l, m, nの前で脱落することを不可としてる．

さらに奇異なのは，長母音・二重母音・l, n, r に先立たれた語末の b, d, g を無声・lenis の〔b̥〕〔d̥〕〔g̊〕と定めて，無声帯気音の〔p'〕〔t'〕〔k'〕と区別した点である．

Rad〔ra : d̥〕—Rat〔ra : t〕, seid〔zaed̥〕—seit〔zaet〕, Alb〔alb̥〕—Alp〔alp〕, barg〔barg̊〕—Bark〔bark〕

Siebs が後綴の -lich, -lein, -los, -nis, -bar, -sam, -sal, -sel の前の b, d, g を無声無気音と規定したことは実際の発音の観察の結果であるが，語末音に関する区別は現実に行われていないものであって徒に Bühnenaussprache の修練を繁雑ならしめたに過ぎない[2]．この規定は俳優自身でもいかに守り難い所であったかは，1957年に De Boor らが試みた Siebs の „Bühnenaussprache" の改訂版を見れば容易に察せられるであろう．この新版では問題の〔b̥〕〔d̥〕〔g̊〕が〔p〕〔t〕〔k〕に統一されたばかりでなく，舌音の〔r〕と並んで口蓋垂音の〔R〕も認められて一段と現実の傾向に近づいて来た．また声門閉鎖音をもってはじまる母音の堅い声立て（fester Einsatz）に代って，いわゆる柔い声立て（weicher Einsatz）が推奨されている．„Bühnenaussprache" こそ外国人の範とすべきであるという Kuhlmann の „Deutsche Aussprache, Lehr- und Lesebuch für Ausländer" も改訂版 Siebs によっている．ところが今日のドイツ舞台の動きはさらに進んで居り，Berlin, Hamburg, München 等の由緒ある劇場で上演される古典劇においてさえも，Bühnenaussprache の規定からはずれた発音がしばしば行われるのである．たとえば，Schiller, Vater などのアクセントのない語末の -er は [-ər], [-əR] と発音されることはむしろ少く，たいていは中舌音の [ɐ] である．ここにおいてわれわれは舞台での発音にさえも口語の傾向が侵入しつつあることを知る．まして，自ら強い音響の効果について配慮する必要がないラジオ・テレビ放送では，口語の自然な調子で発音されるのは当然の成行である．そこでは Siebs が不可とした弱音eの脱落はむしろ普通でさえある．また改訂版 Siebs と Kuhlmann が今なお全面的に要求している無声閉鎖子音の帯気も，普通はアクセントのある母音に先行する時に強いのであって，Puppe/pupə/, Tante/tantə/ などにおける弱音節の p, t では気音が非常に弱いか，あるいはまったく欠けている．同様のことは

spät, stets のごとく [ʃ] に先立たれた p, t についても言える．なお Haupt, nackt などにおける [-pt] [-kt] では [p] [k] に気音が続かないのが普通であるが Bühnenaussprache ではこれを規定している．また Träne, Ähre 等における〔ɛ:〕は Siebs が綴字を顧慮しての規定であろうが，短母音は開音，長母音は閉音という発音の型から脱れた唯一のものであるため，北独一般の傾向として閉音の e〔e:〕として発音されることが認められる．放送ドイツ語においても，それがしばしば起るが，綴りを顧慮した丁寧な発音でも hell, fällig 等における開短音の e〔ɛ〕より，舌の位置がやや高く口の開きもやや狭い母音（〔ɛ̝〕又は〔e̞〕で表わせる）であることが非常に多い．次に au, ei, eu における二重母音について見ると，Siebs が現実の発音を観察し〔ao〕,〔ae〕,〔ɔø〕と定めたことは理由があると言えよう．たしかにそれらの第二要素は閉音の〔u〕〔i〕〔y〕として実現されることは少く，それぞれ〔o〕〔e〕〔ø〕の舌の位置以上に持上ることは必ずしも多いとは言えない．しかし，口語において聞かれる所は一種に限られることはなく，/au/ では〔aɔ〕〔ao〕〔ɐo〕〔au〕〔ɔo〕, /ai/ では〔ae〕〔aI〕〔æI〕〔aɛ〕, /oi/ では〔ɔø〕〔oy〕〔ɔɛ〕〔ɔe〕〔ɔY〕〔oI〕等いろいろの音が観察される．これらの二重母音はいわゆる „fallende Diphthonge" であって第二要素は弱く，舌に弛緩が見られるのであるから，Siebs は長音で緊張した母音としてあらわれる〔o〕〔e〕〔ø〕と規定する必要はなかったのではあるまいか．Bühnenaussprache は丁寧な発音であるから，口語の丁寧な発音にも現われる〔aU〕〔aI〕〔ɔY〕を採用した方が舌の lax な点を考えてもよく[4]，舞台発音を普及させる上に有利であったと思われる．

さらにBühnenaussprache を訓練する Sprechkunde の教授等が主張するきわめて円唇音化を伴なう傾向が強い〔ʃ〕— それも〔ʃ〕- 音を形成するに当って必要な空洞を誇張するあまり，そり舌音ともいえるほど舌端を口蓋へ向って持上げることがしばしば要求されるのであるが[5]— も，私はこのような訓練を受けた学生のほか，わずかに一度説教で観察したことがあるきりで，普通の口語では（テレビ放送のアナウンサーを含めて）行われていないことを確めた．

従って今日ドイツ語の発音を記載する辞書においては，ただ Siebs, Viëtor のみを典拠とするばかりでなく，口語において一般化した事実を採入れることが肝要であろう．それは „標準音" のくずれではなく，生きた言語の実相であるから．その意味においてひとあしドイツに先んじ，最近の相良大辞典において発音担当の信貴辰喜氏が，脱落しやすい〔ɔ〕,〔r〕を特別にイタリックで表わすことを試みたのはきわめて妥当といわなければなら

ない.

5. ドイツ国内の共通語の普及については，昨年10月ドイツからアルサスにおける独・仏二言語使用の状況を視察に来た方言学者の一団を Strasbourg で歓迎したフランス・ゲルマニステイクの泰斗 J. Fourquet が注目すべき発言を行った. „ドイツの共通語化のテンポは相当なものであるから，ドイツ領内の Niederalemannisch は消滅する日が来るであろう. その時には，農民の間でドイツ共通語の影響を受けずに語られているアルサス方言こそ純粋な Niederalemannisch として人の注目をひくであろう". と. 独・仏両国の方言学者の一般的な意見は，„現在ドイツ共通語と隔絶して農民が話しているアルサス方言こそ，教育はもっぱらフランス語で行われる現状にかんがみやがて消滅して行く" というにあったのである. ドイツにおける共通語化，アルサスにおけるフランス化何れも注目に値する事実である. 北ドイツと異った発音の型を有する南部方言を母語とする人は，にわかにその型をすてきれないが，方言を離れて共通語を使って話そうとする限り，いくらかでも口語共通語の発音を顧慮する傾向があり，有声の s〔z〕を用いること等には困難を感じない. 彼らが困るのは有声閉鎖音であるけれども，その lenis はまた北独になく，この地方の人はこれを自分達の有声音として聞くから会話に困難を来すことはないといえよう.

私が1959年秋から一年余にわたって滞在していた Marburg 市は中部ドイツのヘッセン (Hessen) 州にあるが，ここでも共通口語がよく普及していることが観察された. それには幾つかの原因がある. まず第一は16世紀以来の大学町として，大学関係の職員と学生が多いためである.（人口5万の都市に学ぶものが8千人ほどいる.）彼らは無論文語にもとづく共通語を使う機会がはなはだ多い. その地理的位置が西ドイツの中央であるので，北からも南からも学ぶ者を招くが，彼らはきわめて方言色のある発音を避けようとする. さらに学問の府として，国民学校・ギムナジゥムの教育も盛んであり，国語科を担当する教員の質が優秀である. そこには Deutscher Sprachatlas で修業を積んだ教師も何人か居る. 一方において町の新しい地域には東プロイセンや上部シレジア (Oberschlesien) で，故郷を失った人々が群をなして住んで居り，現在の東ドイツから避難してきた人々もその中に加っているので，彼らが互いに交渉する限り，なるべく方言的特色を出さないようにしている. 彼らが旧市内の人と交渉する場合も同様である. また近年は機械，化学染料，光学器具等の工業も勃興し，町の新区域にはまた各地から働きに来た人が住んでいることも見逃せない. 加うるに Hamburg-München 間の急行がとまる主要駅であり，Kassel-Frankfurt 間の聯邦自動車道路 (Bundesstraße 3) が通過している観光都市として人の往復も

活溌であり[6], 国際的な会議も開催されるといった事情も相働いている．なるほど Sachsen から転入して来た成人は ich-Laut を殆ど〔ʃ〕に近く発音しているし，Oberschlesien 出身の人はきわめてはげしい巻舌の〔r〕を使い，Hannover 出身の教授は Stein, Sport の〔ʃ〕を〔s〕と発音しているにもかかわらず，彼らの子供は周囲に同化され，それらの特色を示していない．このような次第であるから，Marburg は Giessen, Wetzlar, Nassau, Bad-Nauheim 等の諸都市と共に Westmitteldeutsch の中の Hessen 方言 (Hessisch)の地域にあるとはいえ，全体として方言的特色を脱した発音を示して来ているのである．Hessisch の特徴である〔aiç〕〔eiç〕(=ich),〔ru : tə〕(=roten),〔bruor〕(=Bruder) 等を市内で聞くとすれば，周囲の村落から所要でここを訪れた人か，村落出身の古老の発話においてである．典型的な Hessen タイプ (typisch Hessisches) ということは，(語法をも含めて) 避くべきものとされている．

学校での訓練を見ると，綴りをどう読むかという点に重点がおかれて居り，母音については長母音と短母音の区別を厳密にすることが要求されている．二重母音は Bühnenaussprache の規定によることなく，音韻論的に /au/, /ai/, /oi/ として解し得る程度の発音であれば微細な点で注意されることはない．閉鎖音については有声，無声の対立が問題にされるが無声の気音はやかましく求められない(というより，それに触れることはない)．母音に先行する s の有声，綴字 w の唇歯音としての性格，ach-Laut と ich-Laut の区別についてははっきり修練することが求められる．語頭の sp, st の〔ʃ〕音は絶対に必要とされる一方，Wurst, ist 等における s を〔ʃ〕と発音することは排斥される．ところが Bühnenaussprache では発音しないことになっている Ruhe, Schuhe 等の h は，ゆっくりした朗読で発音しても禁じられることはなく，多くの教師が行っている．また nächst, höchst, wenigst 等は〔nɛ : çst〕,〔hœçst〕,〔ve : nIçst〕と発音せず〔nɛkst〕,〔hœkst〕,〔ve : nI kst〕と発音する場合の方が多い[7]．このようにして Marburg において聞かれるものは „標準ドイツ語”ではなく，日常生活の交渉の中から生れたはばのひろい共通口語である．西ドイツ全体として見るならば，人口の三割に及ぶ千数百万の人々を東から受け入れたことと，交通網の高度の発達によって人の移動が極めて容易になったことが各地における共通口語の普及のテンポを早めていると言える．それらは一応放送ドイツ語を範として，互いの接近を続けるであろう．しかしもはや舞台発音の規準が生きた言語の動きを束縛することはあり得ぬ時なのである．

註(1) Marburg 大学の Deutscher Sprachatlas の所長 L.E. Schmitt が直接筆者に語った言である.

(2) Walter Kuhlmann : Deutsche Aussprache, Lehr- und Lesebuch für Ausländer(1958[6], Freiburg), s. 9.

(3) Siebs の規定に大体賛意を表した W. Viëtor もこの点には反対であった. Deutsches Aussprachewörterbuch, (1921, Leipzig) S. VII.

しかし München 大学で音声学を講じていたデンマーク人 Jörgen Forchhammer は Deutsche Aussprache-Übungen (1938, München) において〔p-b-b̥〕,〔t-d-d̥〕,〔k-g-g̊〕の練習項目を詳しく設けている.

(4) Hamburg 大学の音声学教授 O. v. Essen は1960年にスウェーデンの首都ストックホルムから行った放送のテキスト (SPRECHEN SIE MIT ; Övningar i tyskt uttal av Otto von Essen, Radiokurs våren 1960) において〔aI〕,〔aU〕,〔ɔY〕と表している. 私がこの点に関して尋ねた時, 実際口語の丁寧な発音ではこうなることが多いから Siebs のように〔e〕〔o〕〔ø〕を用いる必要がないと説明した. なお彼は主著 Allgemeine und Angewandte Phoetik (1957, Berlin S. 66) では〔a^I,a^U, $ɔ^I$〕と表わしている. もちろん彼は二重母音がいろいろのニュアンスをもって発音されていることを認めている. Essen の弟子で Hamburg 大学の講師である H. Wängler は〔a^I, a^O, $ɔ^I$〕と記している. (Grundriss einer Phonetik des Deutschen, 1960, S, 110ff) 日本で親しまれている Viëtor の表記〔ai, au, ɔy〕は音韻論的には意味があるが, 精密な音を伝えるというのであれば, 南ドイツの一部にもとづいたものと言わなければならない.

(5) Marburg 大学の1959年冬学期において Lektorat der Sprech-, Vortragskunde を主宰する Chr. Winkler 教授は〝外人のための発音演習〟を行ったが, Kuhlmann を用いて „Bühnenaussprache" の要旨を把握させるようにした. 彼はこのように**円唇音化**の強い〔ʃ〕を常に要求したが, それは英米のゲルマニストもなかなか巧くできず, 彼らは現実の口語であまりみないものとして批判的になった.

(6) ドイツ領以外でも, 観光・保養の地として知られた地は, それがドイツ語地域にあるならばしばしば方言的な色彩の少ないドイツ語が聞かれる. たとえば北イタリアの Tirol にある Meran 市には, 1年を通じドイツ各地から保養客が集って来るので, 町ではなまりのないドイツ語が使用されている.

(7) Marburg の1小学校の女教師 Frau Schellenberg は大学の Germanistik を専門に勉強した人であって, なまりのない発音で授業しているが, 同地から11キロ離れた農村 Niederwetter に生れて育ち今なお居住して農民とは Hessisch によって交っている. それゆえ, Sagen Sie! のごとく常に使う句などにおいては無意識に g が有声の軟口蓋摩擦音〔ɣ〕となっていることが多い. この母音間で摩擦音化した g は北ドイツの各地で聞かれるものであるが, Bühnenaussprache では退けられて居るばかりでなく, 共通口語でも次第に駆逐されつつあるものである.